

MfG_J_Splendor_of_Figurative_Art_in_Kote-E.ppt



錦絵の魅力（動物編）

2021年11月 春日

サフラン酒の錫絵蔵の魅力は、何か

サフラン酒の錫絵をはじめて見た人は、驚きますが、その原因は、何でしょう。

正面の二階の、
周りの白壁に映える
二羽の青い鳳凰の
美しさと思う人も
多いでしょうが、…。

他も、見てみませんか。



サフラン酒の錆絵の愉しみ方として、
四神・四靈の天下安寧や十二支の五穀
豊穰を意図する話も欠かせませんが、
錆絵の動物そのものを見ることが、
一番最初のポイントだと思います。

想像上の動物の四神・四靈については、
本当の形はわかりませんので、
造形に関する議論はしません。

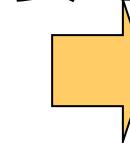
ここでは、十二支の動物に限って、
造形、色彩、表現の巧拙について、
個人的感想を試みたいと思います。

サフラン酒の錆絵と、西伊豆・松崎の錆絵との比較

	サフラン酒	西伊豆・松崎
手法の比較	錆のみで色漆喰を塗り、削って成形	錆で漆喰を塗った面に、日本画技法により筆で色づけ
飾る場所 (見る距離)	屋外も適する (基本的に遠くから)	基本的に屋内 (基本的に近くから)
細かな描写	苦手	得意
色の数	いくつかの単色	複数色 (絵画)
色の微妙さ	苦手、錆で補足	得意

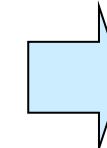
サフラン酒の鎧絵の魅力と愉しみ方

鎧の技、本来の造形・デッサン力の凄さ
～とりわけ、十二支の鎧絵



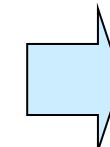
今回

色彩（鎧絵・鎧絵と白壁周囲）



別途、顔料編、
青編

グループピング、配置の絶妙さ
～とりわけ、四神・四靈の配置



別途、配置編
結界編

全体の思想意図(四神・四靈と十二支)

～五大、四神・四靈の天下安寧、
アコミズム、十二支の五穀豊穰の暗喩

鎧の技、本来の造形のすばらしさ とりわけ、十二支の鎧絵について

十二支のうち、九種の動物が飾られています。
皆さん、一番のお気に入りは、どれでしょうか。

みんな素晴らしいのですが、私は、南面の
酉(ニワトリ)が、特に気に入っています。

南面二階の酉(ニワトリ)



まず第一に、羽根を描いた鎧の技が
ダントツに冴えわたっていると思います。

雄鶏の勇猛な姿も印象的ですし、
背景の花の色彩との調和も、
考え抜かれているように感じます。

全体的にバランスがいい。
一番落ち着いて、見ていられます。
仏画を見るようです。

また、酉に負けず劣らずな技の冴えが、
北面の子(ネズミ)です。

二階にあって遠くであり、かつ子も小さくて、
殆どの方が見逃しがちだと思いますが、
迫真の描写力です。

双眼鏡で観察して初めて気づきますが、
動物の写実度という点でも、
ダントツの第一位だと思っています。

北面二階の子(ネズミ)



小さなネズミの手足の動きの中の一瞬を捉えた、並々ならぬ観察力と、それを実際の形にするという、冴えた左官の技量は、酉に匹敵するように、思うのですが、如何でしょうか。

口元、目、耳も、キレキレの腕です。

さて、錆絵の動物で、ひとつ、どうもおかしいと思われるのがあります。ネコに似ているという戌でも、ありません。

それは、
未(ヒツジ)
です



実は、ヤギとおっしゃる方もおられるのです。

角の形状が、カールしていること。
尾が長いこと。
ヒゲがあること。

これらはヤギの生物学的な特徴であり、
ヤギ説が妥当なように見えます。
でも、絵が間違っているとは言えないようです。

何故なら。

中国語では、ヒツジは“綿羊(ミエンヤン)”、
ヤギは“山羊(サンヤン)”と書くそうです。
中国では、漢字表記上でもヒツジは「羊」の
一種で、ヤギは「山の羊」扱いであって、ともに
羊の一種として捉えられているようなのです。

これは、中国大陆でも台湾でも同じとのことで、
干支としては、どっちでも、いいようです。
ですから、サフラン酒の絵柄も、間違いでは
ないようなのです。

酉、子、未と、南面の二階、そして
北面の二階、一階から、それぞれ
一つづつ選んで、お話ししました。

もうひとつ、別の角度からの見方として、
この「エリア毎」に見たとき、
どれが、お好みですか。

私は、北面の二階が、一番ツブ揃いだと
思っています。



しかも、この四匹は、酉、未と同様に、ほぼ
単色で、塗り込みの腕が、際立っています。
鎧の造形の技だけで、表現しきっています。

『単色の持つ力』

鎧の技は、北面二階が勝っていると思います。
東面の四神・四靈も、少ない単色で表現しきって
おり、しかも「靈力」は、こちらが上に感じられます。

個人的には、土蔵の入口・受付の多色の四枚
も含め、この東面の単色鎧絵に感動しています。
この単色で表現しきったことが、「単色の持つ
鎧絵の力」となり、これこそが鎧絵の力であり、
白壁との対比の美を含め、機那サフラン酒が
「鎧絵の横綱」と云われる由縁のひとつでは、
ないでしょうか。

『鎧絵は、遠方から眺めるべし』

～ 春日の自説です。

左は、少し粗くみせるアート処理を施してみた、鎧絵蔵冠木門の両扉を飾る恵比須様と大黒様。

もし二階に飾られるなど、遠くから眺めたら、こんな感じと思います。

現状の、間近に見た印象と違い洗練度が増したようにみえます。如何でしょうか。



尚、この大黒様の撒き散らす小判は、サフラン鎧絵で数少ない、17筆など、鎧以外の道具を使った部分と云われています。

結論として

伊豆の長八さんの錆絵は、いろんな種類の錆絵の集合です。

『長八さんの錆絵』もすばらしいものです。でも、長八美術館の作品を見た経験から、『サフラン酒の錆絵』の魅力を一言で云うと、伊吉さんの「錆の技の冴え」と、ひとつの建物に「錆絵満載の豪勢さ」だと思っています。

詳細は下記を参照下さい。

MfG_J_Trying_classification_of_Japanese_Kote-E.pdf